

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十六年二月二十五日 印刷 昭和三十六年二月一日発行

第二十七卷

第二号



二月号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料八〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行

旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に

改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智 著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土二月号 目次

表紙・扉絵

さし絵・カット

結城天童

加藤金一

一九六一 宗教界展望(下)……………白幡憲祐(6)

涅槃の日におもう……………服部英淳(2)

エジプト記……………佐藤密雄(10)

中国綺譚 迷 執(上)……………牧尾良海(15)

竜安寺方丈庭の卑見……………藤木随教(26)

な―にこれ位のこと……………合田微雪(30)

初午の頃……………黒川弘賢(24)

熊谷真実の浄土信仰……………阿川文正(18)

法然上人の感化……………村上博了(20)

高僧伝 獅子谷仏定……………大橋俊雄(22)

新篇 百 喩 経(11)……………伊東拳位(9)

―扉の御法語……………(26)― 童心仏心……………(29)―

仏祖のことば(2)……………宮林昭彦(28)

浄土

二月号

次に本願に乗ずるに二の様といふは、一には罪つくる時乗ずるなり。その故は、かくの如く罪をつくれば、決定して地獄に落べし。しかるに本願の号を唱れば、決定往生せん事のうれしさよとよろこぶ時に乗ずるなり。二には道心おこる時乗ずるなり。其故は、此道心にて往生すべからず、これ程の道心は無始よりこのかたおこれども、いまだ生死をはなれず、故に道心の有無を論ぜず。造罪の軽重をいはず。ただ本願の称名を、念々相続せんちからによりてぞ、往生は遂べきとおもふ時に、他力本願に乗ずるなり。

法然上人御法語



涅槃の日におもう



服部英淳

☆

願はくは花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

西行

では涅槃のお絵像をかかげて、法要をいとなみ、はるかに大聖釈尊の御生涯をしのび、又熱心な信者の参詣もあるが、昔ながらの賑いを見せる所は少なくなった。

山寺のねはん参りや昼さがり

牛の子の庭に出そむる涅槃かな

陰暦の二月十五日、涅槃会の頃は、暖い地方ではもう桜の花が咲く。西行の有名なこの歌が、釈尊の入滅をしのんだものだと思う人は少くなっている。「きさらぎ」を、「如月」とか「更衣」と書いたり、「きさらぎのわかれ」が涅槃会の異称だといっても、季節感が湧いて来ない。

寒い地方でも、冬芽がほころびはじめ、春待つ鳥の声も聞こえて、ながい冬ごもりに別れをつけようとする時期に、涅槃会はふさわしい行事だったと思う。もちろん、今でも寺々

新暦の、余寒なおきびしい二月十五日には、こんなのどかな風情はない。春四月の花祭りにくらべて淋しいのもやむを得まい。

涅槃会には地方によって色々な風習がある。私の田舎の寺では、涅槃会に「やしうま」というものを供養する。米の粉をこねて臼でつき、蒲鉾形にのして、うすく切ったもので

ある。これを焼いて砂糖醬油をつけると、おいしく頂けるので、子供達が喜んで貰いにくる。

「やしょうま」とは、どんな意味か今でもわからないけれども、子供の頃、年寄が「お釈迦さまがお亡くなりになる時、これを作ってさしあげたら、〃やしょうまいよ〃といわれたそうだと教えてくれた。釈尊の最後の御供養は、チュンダという鍛冶工の旃檀の茸だともいうし、豚の肉だったとも伝えているが、私は何となく釈尊出家前の妃「ヤシヨダラ姫」を連想するのである。

勿論根拠があるわけではない。

☆

もともと涅槃は「吹き消されたこと」とか「消えたること」という意味で、滅とも寂ともいう。罪惡煩惱や、それが積み重なって、更に人生の苦を招く「はたらき」となる「業」が、正しい智慧と修行によって消滅し、再び生れかわり死にかわりして罪を重ねることがなくなったことを言うのである。釈尊は悟りを得た「仏陀」（覺者）であるから、勿論涅槃を得られたのであるが、なお肉体的な束縛があるので「有余涅槃」といい、肉体も、従って精神活動もなくなったのを「無余涅槃」といっている。だから涅槃は死と同義語ではないけれども、私はやはり、弟子達に最後の教えを説き、「頭

北面西」して、弟子達の哀惜の内にお亡くなりになった人間釈尊の「死」の姿に合掌したのである。

☆

数年前のことであるが、私の檀家の幼児が川に落ちて水死した。回向のあとで、幼児の若い父親と、子守をしていた老母とが、代る代るその悲しい模様を私に訴えたのである。若い父親は、老母の不注意だといい、老母は眼の悪い足の不自由な私に子守をさせるのが無理だったと抗議する。そして父親は「毎日こうして喧嘩をして泣いています。そこで近くのお寺に伺ったところ、それは寿命というものだから、あきらめなさいといわれました。しかし思い出すだけでも可哀想で、どうしてもあきらめられません。どうしたら良いでしようか」と相談を受けたものである。

私はこれを聞いて驚いた。ずいぶん惨酷なことを教える和尚さんもあるものと思った。可愛い我が子、我が孫の思いがけない死を見て悲しまない者はなかるう。老母が息子に、息子が老母に、その悲しみをぶっつけたくなるのも無理とはいえぬ。

「あなたは、あきらめなさいといわれて、あきらめきれますか」「どうしてもだめです」「あきらめられないのが本当です。法然上人は、あきらめられない、人の心を知っていて

下さったのです。あきらめて、忘れてしまつては子供が可哀想です。朝に夕に供養して、思い出しては念仏を回向して下さい」と、こんなやりとりをして帰った。その後、お互いの悲しみをいたわり合い、あたため合つて、連れだつてお寺参りをする母子の顔は明るい。

「大死一番」という言葉がある。死を乗り越えた達人の境地を示したものであろう。「死を見ること帰するが如し」とか「心頭滅却すれば火もまた涼し」という文句もある。結構な言葉とは思ふが、私にはこれが「悟り」であるとも「涅槃」であるとも考えられない。蜀山人が辞世の歌に

今までは人のことじやと思つたに

おれが死ぬとはこいつたまらん

と詠んだというが、浮世を超越したように見えるこの歌に、無限の哀歎が秘められていると思う。

私がまだ中学生の頃に読んだ藤村の小説「春」の中に、藤村等の自然主義文学運動の盟友であつた北村透谷が、

死もまた眠りの一種なるかも、眠りならば夢の一つも見ざる眠りにあれよ、さらばなり、さらばなり。

と書きのこし、剃刀自殺をしたという一節を今もなお印象深

くおぼえている。ニイチェやショーペンハウエルなどに心をひかれたのも、病身だった為めばかりではなかった。幸いに「死は永遠の謎」ではなく、自殺が罪惡であることを知らされた今では、青少年時代の感傷として懷しむのである。

☆

釈尊が出家される前に、王城の四門に出遊して、たまたま老者、病者を見て凡ての人のまぬかれ難い姿であることを知り、特に死者の葬列を見て人の世のはかない終局を考え、遂に出家求道を決意されたという。

釈尊は自ら

「比丘等よ、このような栄華の中に、又このような美しい健やかな肉体を持ち、私はこのように考えた。世間の人は自ら老あるもの、自ら病あるもの、自ら死あるものであり、この老と死と病とを越えることの出来ないものでありながら、あたかも越え離れることが出来るかのように、他の老と病と死とを見て、嘲り笑い、厭うている。しかしこれは正しいことではない。私はこのように考えて、青春のおごと、健康のおごとと、生存のおごととを棄てたのである」(中阿含、柔輓經)

と語つて居られる。

こうして釈尊は、六年間の深い思惟と、はげしい修行によ

って、悟りを開かれた。その教えは四十五年間にわたって、かぎりなく広く深いものであったが、現実的な快樂主義と、非現実的な苦行主義をいましめ、「仏心とは大慈悲是なり」とあるように、老病死の厳しい事実を正視して「ほとけ心」を以て互にいたわり合い、悲しみを分ち喜びを共にして、正しく明るく生きよと教えられたのである。涅槃は決して冷やかな、さとりすましたものではなく、自己の罪業因縁の深さを知る者に感ぜられる、暖い「仏心」に満たされた境界であり、幸福な世界であった。大乘仏教では、涅槃の本体は不滅の仏身であると説いたり、浄土を説いたりするのも、この意味である。

涅槃のお絵像の、釈尊をとりまく弟子達や、天の神々も、地上のあらゆる生物も、或は顔をおおい、或は地に伏して、大聖との永遠の離別を歎き悲しむ姿は、釈尊の死を涅槃と呼ぶにふさわしい状景である。

☆

昨年は淑徳学園の職員の家族や、生徒の父母に物故者がつづき、しかも生徒が四人次々と亡くなった。火葬場で友達同志が手を取り合って「どうして死んだの」と呼び、「あなたは今何処に居るの」と呼びかけるのを聞くと、胸がしめつけられる思いがする。いたましい限りである。この中の一人

は、五月の中学三年の修学旅行に、元気で大和奈良京都を巡り、知恩院や釈迦堂へも参詣し、半月後に急死した。私は奈良大和路の寺々を参詣しながら、いつも思い出すのは万葉歌人山上憶良の歌である。

水沫^{みなわ}なす微^{ちひろ}き命もたく繩の

千尋^{ちひろ}にもがと願ひ暮しつ

倭文^{しづた}手纏^{たまき}数にも在らぬ身にはあれど

千年^{ちとせ}にもがと思ほゆるかし

その妻の死を悼んで

愛河の波浪己に先づ滅び

苦海の煩惱も亦結ばるることなし

従来此の穢土を厭離す

本願生を彼の浄刹に託せむ

浄土は大慈悲心によって荘厳された涅槃界である。私も亦、若くして穢土を厭離した生徒達の命を彼の浄刹に託したいと思う。

四月、高三の生徒と共に、法然上人流謫の遺蹟たる四国讃岐の法然寺で、久方ぶりに有名な涅槃像にお詣りすることが出来た。二月十五日には仏生山の町をあげて賑うということである。

(大正大学教授 淑徳学園長)

宗教界展望(下)

— 神道と新宗教 —

白 幡 憲 佑



昨年三月十九日に発表された厚生省通達の「墓地・埋葬等に関する法律第十三条の解釈について」をめぐって創価学会と仏教界の墓地闘争は行政訴訟へと持ち込まれ、解決をみぬままに某宗教紙の表現をかりれば「湿地帯の長期闘争」の感をますます深くしてきた。もっとも此の墓地問題は仏教界だけの問題に留らずにキリスト教界にも影響を及ぼすなど、広く宗教界全般が現存の行政訴訟の成り行きを注目しているのである。

そこで創価学会がこの墓地問題に昨年从今年にかけて二面作戦をとり始めた事が注意をひくのである。勿論、一方は訴訟に完全勝利を収めて既成教団の経済的基盤の破壊を狙うと共に一面に於て、若し敗れた時に学会員の遺骨は何処へいくのかといった不安に対する解答を大石寺の納骨堂完成によって示してきたのである。この納骨堂は十萬体を収めることが出来、使用料は五年間で二百円という低廉なものである。この様な二本立による墓地問題の処理は従来の猪突猛進の行き方からみると非常に慎重さが窺われるのである。この一件ばかりでなく昨年下半年から今年にかけて学会は大きな変化期に遭遇しつつあるようだ。前にも述べたがキリスト教を邪教として

宗教的に認めなかったものを昨秋の池田会長の訪米を機会に「低級な宗教」と一歩後退した事実が残されている。又こんどの伊勢神宮問題にしても神道を邪教とするならば、当然はげしい誹謗が予想されたのに本部の見解は「国家の象徴(天皇)の墓所として敬意を払う」といった温容さを示しているのである。この様に既成各教団に対する態度の大変化は昨秋以来の聖教新聞の紙面にも現れてきた。同紙が仏教界ニュースを扱った場合は例外なく邪推と暴言を添えて報道してきたのに最近は何んらの批判も加えずサラッと発表しているのである。

それでは学会の転身の原因は奈辺にあるのか。又どの程度の変わり方を果すのか、これが創価学会の今年の動きとみて先ず間違いはなさそうだ。この変化を学会がオトナになってきたのだとする成長説と行き詰りによる打開策だとみる二説があるがどうも後者の説が事実らしい。海外広報策も国内のゆき詰りを打開する一プランであり、大石寺納骨堂も墓地問題による会員離散の防止策なのである。

旧菩提寺を相手取っての訴訟も学会お抱えの四人の弁護士が作戦を授けているが経済的には金パッチの財務部員の場合にはなんとか

なるが一般会員では「金銭のゆきづまり」を本部に訴えてきているらしい。この他、東京あたりでは選挙を目当てに学会のシンパとなつた都會議員が相当数あり、此の連中が戦闘的なやり方に対してブレーキを進言したりしているようだ。これ等の変化から予想すると墓地闘争は現在やっている訴訟に対しては「湿地帯の長期闘争」を進めていくが、今年は新たに寺を相手に訴訟を起したりするケースは減ってくるのではなからうか、又既成仏教教団に対しても除々ではあろうが強い挑戦せずにもろ妥協性をみせてきそうだ。学会全体の動きからみれば未だ小さな転換だが、この集団の本質的な性格からみれば驚くべき事であり、今年の進む方向はまことに興味をもたれるものとなってきたのである。

昨春、創価学会から折伏の果し状をつきつけられた立正佼成会ではその後、教学研究与会員組織の充実に奔走してきている。もとより総合的にみても創価学会より優位が伝えられていただけに相手も身延山あたりを攻撃したように果敢なナグリ込みは出来ずに、専ら下部組織の折伏といったゲリラ戦に終始したらしい。これに対応して佼成会では会員の離散を防止すると共に更に充実した発展と一石

二鳥を画して組織変えを行った。いま迄の支部組織は会員間の互いの縁故など人の関係の上に出来ていたが、今度は地区教区制に変更したのである。これにより全国を十教区に分け、その下に百四十支部を設立した。そこで横の連絡が充分にとれる様になった為にいま迄は詳細に欄めなかつた会員数もハッキリ確保する事が出来たと本部ではいつている。昨年十一月で四十二万世帯と発表されたが、増加数は地区制度に変わる迄は年平均が四万人と云われていたのに昨年は三万人と減少している。本部では制度変更が会員増加に影響したのであり軌道にのる今年は飛躍的にのびて年内に五十万世帯になると豪語している。そして今年は各支部の強化の為に支部道場の新築も計画されており、現在では十三支部の道場が予定されているようだ。この支部道場の建設と共に本部の病院、更に新館を増設するらしい。まったく此の教団は年来に亘つての建設ブームで完成を急ぐ大聖堂と共に今年は工費だけで九億円は突破するらしく、三十六年度予算は十五億円以上になるとみられているのである。外観の偉容と共に内部の進展にも今年は相当な苦心がはらわれそうだ。先ず青年会に於て従来の御利益本位から脱皮して

「宗教と現代」とか「信仰と現実生活」といった問題と真剣に取り組み始めている。殊に昨秋の浅沼刺殺事件の前後から社会・時事問題に対する関心がこの教団では強く打ち出されてきているようである。今年は青年部が中心となつて社会生活と密接な信仰の在り方を示して社会悪の一掃に乗り出すと張切つていく。この動きは本部の幹部間でも好評で積極的に応援して教勢拡張に結びつけていくと語っていた。更に創価学会と同様に海外布教も本年の課題の一つである。既にハワイ、ロスアンゼルス、の両支部には二千余名の会員がいると云われ、ハワイ支部は本年中には教会認可がおりるとのことである。又、現地指導に本部から理事を一名派遣させる予定を持つなど活発な動きを画している。

この他、霊友会・妙智会・生長の家など一連の新宗教々々団も黄金の年の余慶にあずかつて経済状態の好転から本年は意欲溢れる活動を期しているようだ。まず霊友会だが数年前の社会的悪評からやっと脱け出してきた様子である。一時はどん底を極めた青年部も大会の集合状態が昨年四月の東京では一万人、十月の長野では五千五百人と着実に復活している。本年も四月に東京で大会を開く予定

であるが、此の青年部と婦人部である。国友婦人会の活躍に本年の霊友会は希望をかけている。伊豆半島の遠笠山に建設中の弥動堂も本年中に完成されるであろうし、若干二十五才の東京大学大学院学生が理事長となつての教勢巻き返しは注目に価するものがある。

信徒二十万世帯の中堅教団である妙智会は東北地方に地盤を持っているが、本年は関西地方へ布教の重点を置くとのこと。信徒会館の完成も間近かにあり、更に妙智会後援会が日通副社長の馬場某が会長となつて準備中だが、本誌が出る頃には発足しているだろう。東京の宗教記者クラブあたりの茶飲み話では妙智会が本年の新宗教で最も進展する本命だとみる説がある。たしかに本部団参も非常に多くなり地味な団結力は既成教団の驚異となりそうだ。

これ等の新宗教といささか異なる内容を持つ生長の家も總裁の谷口雅春の思想が例の山口二矢に大きく影響したとあつて月刊誌「理想世界」が本年一月には十万の誌友に増加してきている。もっとも教団では右翼弾圧を警戒してか本年はあまり派手な動きはしないといっているが下からのユサブリでどんな事になつていくか、社会情勢の変化によつては意外

な方向をたどることも予想出来るのである。

注目される新宗教の今年の動きを総マクリ的に占つたのだが、一般に現世利益から常識的な信仰運動へ脱皮しつつある事と新宗連（新日本宗教団体連合会）の青年会の全国組織を皮切りに各教団ともに青年活動に主力を

傾けるが此れに対応する既成仏教各宗派がどの様な教線を布くか、特に新宗教が強敵と称している浄土宗、真宗など浄土教団が各々の御遠忌を機に飛躍するか、停退するか、本年も宗教界には戦国時代の様相が続くであろう。（中外日報記者）

浄土——三月御忌特集号予告——

法然上人の御歌を読み

椎尾弁匡

念仏のひびき

真野正順

これからの念仏

大野法道

座談会 御忌を迎えて

武田泰淳

佐藤密雄

仁戸田六三郎

司会編集部

法然上人讃仰

増谷文雄

中国奇談

牧尾良海

仏祖のことば ③

宮林昭彦

念仏はよみがえる

竹中信常

その他

◎ 刊行は二月下旬の予定

予約申込受付中

新編 百 喻 経 (11)



遊びぶりを始めたので、老舗A酒店も、遂に看板を人に渡すことになった。

毒喰わば皿までは、恐しいことだ。

三七 不用の長物

大正七年頃、農村のツツガ虫の害を、予防するため、その幼虫を食べるという、ザリガニを、北米から輸入した。

所がその繁殖が、余りにはげしく、田の畦に穴をあけ、一夜にして、田の水が流れ出てしまうような、被害も、頻々として起るのだが、彼の繁殖力という、自然の力を、止めることは出来ず。人間が、必要であろうが、無かろうが、おかまいなしだ。是をうまくセーブするのが、人間の心掛だ。

三八 錯覚

あるおろかな男に、大和のつるし柿を、ご馳走したら

「ほしてあっても、こんなにうまいのだから、ほさないのを食べたなら、もつと

あまくておいしいだろう」といった。

一寸思いつきそうな錯覚だが……

三九 予想屋式

新橋駅の側に行くと、競馬・競輪のある日には、いわゆる予想屋なるものがいて、しきりに、「本命」だとか、「穴」、だとか、天晴れ通振りを發揮して、予想表を売っている。そんなに判るなら「自分が買えばいいのに」、と思う、

高島さんが、殺されてから、易者が、大分信用を失ったそうだ、理由はいわずと知れた

「人の事が判る位なのに、何故自分のことが判らないのだ、結局人の事も判らないのだろう」との意味だ。

世間にはがまの油屋式の事が多いのさ。

(伊東挙位)

三六 夫婦共使

Aという酒屋は、此の近くでは、有名な店で、相当の資産も持ち、店も手広くやっていたのだが、その主人が、フトした事から脱線して女と賭け事に手を出し、家を外に、遊び歩く事が、多くなった。

これを見た妻君が

「どうせつぶす身代なら、自分も遣ってやるんだ」

とばかり、商売を休んで、夫に負けない、

エジプト記

——カイロは不思議なところですよ——

佐藤 密 雄

(一)

九月廿六日の朝と言っても、午前一時半にカイロの空港についた。砂漠の中にピラミッドのある古代風景を思いつづけて来たが、其処は近代建築の大きな空港であった。予定では、ギリシアのアテネを夕方七時十五分に出発して、地中海を横断してカイロまでの航程は約四時間である。おそくとも午後十一時半には到着する筈であったのが、アテネの出発が二時間あまり、おくれたのである。

アテネからカイロへ行く飛行機の会社は、

私共が今まで聞いたこともないユーゴスラベンスキ・エアロトランスポートと言う前世紀的な長い名の会社であって、エアフランスが大株主らしい、アテネの空港について見ると、この長い名の会社は斯界の新参者らしく甚だふるわずして、間借り人のようである。エアフランスのお客は美人のスチュアーデスがつき切りで特別室にいるのに、私共は三等待合室のような所に入れ放しである。私共の飛行機の到着がおくれているらしいが、

が、英語が判然としない。アメリカの老人も

判然としなかったと言うので、そこへ来た美人のスチュアーデスに指定券を見せて聞いたが何も知らないと言うのである。美人の不親切ほど憎らしいものはない。致し方なく、仁戸田博士の提言で飛行場へ出て、ユーゴー行きらしい飛行機を探すことになった。そうすると、飛行場彼方で出発間際らしいのがお客を呼んでいて、それにユーゴーのしるしがついているのである。それとばかりかけ出したが、私は途中で先刻のアメリカ老人夫婦を思い

そこを通るスチュアーデスに聞いても知らないと言うのである。放送は引きりなしに行われている。ギリシア語とフランス語と英語で放送をしているのであるが、アメリカ人の老夫婦がいて、カイロ行はどうしたのだろうと日本人である私に聞く程だから、私共のきき洩しでなく二時間近くおけているのに何も放送もしないようである。そのうちに、私共の出発に関するところらしい放送をした

出してまたあわて乍ら呼びに行ったりしたので、ほんとうに乗ると共に飛行機が出るようなことになったのである。出発からこのようでは、エジプトは面白くないのではないかと不安であったが、然し乗って見ると機体は新しく、食事もなかなかと言うところ、背の高い美人だが肩から腕までソバカスのあるプロンドのと、背はやや低いがはだの美しいシルバーのとの、二人のスチュアーデスがいてよくサービスをして呉れる。私は後者を好むかと思つたが、飴を呉れたのも食事を運んで呉れたのも背高嬢であつた。但し食事の終りに配給する食物の時は背高嬢が紅茶で銀ばつ姫がコーヒーであつたので、私はコーヒーにした。

(二)

カイロの飛行場につくと、丁度月が出ていたが、半月形で黄色かつた。これから二日後に、カイロ出発の前夜のことであつたが、アメリカ大学のフセイン教授のカイロ郊外の私宅で晩さんをいただいたときのことだが、このバルコニーから見た月も同じ色をしてい

た。フセイン教授は詩人肌の人で、エジプト

の月は黄金色で美しいとほめ、冷えて来た夜の空気を「スイート」であるとして何度も深く吸込んで見せられたのを、深く印象づけられたが、然し、その後私の考えたところでは、月の黄色いのは中天高く黄塵があるからである。日中地上から立ちのぼった黄塵は夜に至って中天に達して月を黄色くさせ、地上の空気の方は澄んで来るから、冷氣と俱に空気がスイートに感じるのである。中部ヨーロッパではワイシャツ

は余りよごれなかつたが南に近づくとき、スペイン以来白いワイシャツの首が一日で黒くなるようになった。とくにここカイロではえり首が一回の外出で真黒になるのである。太陽と俱に地上から黄塵の昇る乾燥の国であ

る。

さて、カイロに到着したのは深夜であつたがフセイン教授夫妻の出迎えを受けた。教授はドイツの学会の二週間を私共と行動を共にした人であるし、仁戸田博士とは長い間の親友である。回教の研究者で、カイロ市の名士でもあり、アメリカ設立のカイロアメリカ大学の東洋学の主任で、日本心酔者とも言える程の日本びいきでもある。

空港税関はフセイン教授のつきそいのおかげ



ミラミッドを前にして（左側筆者）

げて無事通過したと言える。勿論簡単ではなかった。例えば実際に外貨持込みの申告をさせられたのはこの税関だけであった。勿論出国に際しては、税関から渡されたこの持込申告の写しに添えて、持出外貨の申告をさせられるのであって、即ち滞存中に外貨を使い、そのことを明にせねば出国出来ないことになっているのである。荷物の検査も厳重であって、私はそれにおびえてか大失敗をした。「何かプレゼントの品を持っていないか」と聞かれた。とくに日本人がエジプト人に贈物と称して万年筆やトランジスタラジオの如きを密輸入すると見られているらしいので、このような言い方で聞くのであるが、「もっていませんか」と聞かれたので、「そのとおりである」と言う意味で「イエス」と答えた。答えてすぐ私は、しまった、もってません「ノー」であったと気がついて訂正にかかったがそれが仲々うまくいかないのである。英国以来空港税関で何をきかれてもノーと答えることにして、それを実行していたのにイエスと言ってしまったのである。そこで私は、

「私は誤った答をした。イエスと言ったのはノーの意味で、日本語の習慣で汝達がノーと言うのをいうっかりイエスと言ったのであるから、私のイエスはノーである。ノーが正しい」と言ったようなことを、私流のジャパニーズイングリッシュで、繰返し乍らしかも、とつとつ述べたつもりだが、相手は何のことか判らぬらしく、「汝はイエスと言いノーと言い、それを繰返しているが、イエスかノーか判らぬから、荷物を開け」と言うことになったのである。全くなさけない限りである。然し、カバンを開くと、まだ小間物店を開かぬ前に、丁度そこへフセイン教授が来たこともあってか、今度は調べもせずすぐよろしいとなってはっとした。実際は私用のトランジスターを一台持っていたが、そのことの申告もするひまなく終わったわけである。この回教の国エジプトでは、回教学者フセイン氏の信用と威光とは大いなるものがあるらしい。同行の博士連も荷物の検査では夫々のあり方で手古ずったらしく、涼しそうな顔を粧しながらも汗をふいているのである。

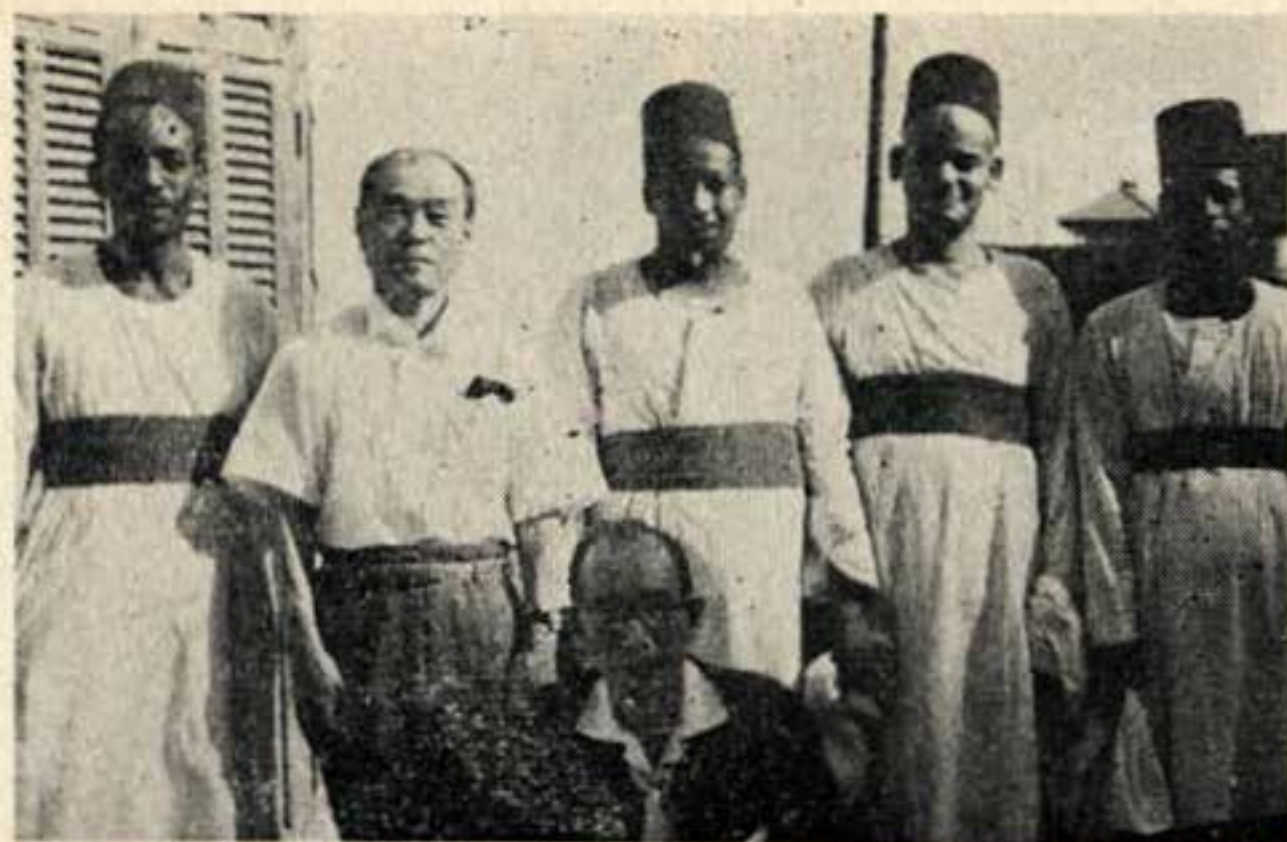
(三)

カイロ空港から市内の空港駅まで約四十分のところを空港バスで運ばれたが、バスに乗って見ると、先程の税関で、ウロウロする私共外人客をば、「アチラへならべ」の、「これに書込め」のと指示し、又親切に「空港を出るとすぐエジプト金が必要だから両替はここですると良いなど」と注意してくれる大男と小柄な女がいたが、私共はいずれも税関史と思い無事に通りたい気持ちからも畏敬の念をもってその指図に感謝していたのであったが、その二人はバスの運転手と車掌であった。そして親切に両替をすすめたのは、この空港バスは有料であったから料金を取り損わぬ為であった。バスの運転手や車掌が税関の中に入って役人の手伝いをするのは日本の鉄道の三等駅以下であろうか、しかし運転手を税関の係長位に畏怖してウロウロする日本の博士連も余りよい図柄ではない。旅の恥はお国へ持帰れないものである。

バスが市内に入ると深夜であると言うのに、案外に人が歩いている。日本の看護婦さ

んの式服のような長い白服をきてトルコ帽をかぶった男のエジプト人達である。エジプトの女の人は黒い布衣を、唐面の達磨のように着て顔もかくして歩いていているのであるが、これは夜中のことで見当らない。

エジプト人から見ると日本人は余程の金持



回教僧と佐藤賢順（左）竹中信常（右）氏

ちか或いは気前の良い人間に見えるらしい。空港からバスに乗る時にも、ジャパンと呼びかけて荷を持ちたがった。この時は、盗難が多いときいていたので、荷物を盗られては困ると思って各自が持ってバスのトランクへ入れた。然し市内の空港駅についた時は、何としても自動車を雇って宿迄行かねばならないのであるが、バスを降りた時から、ジャパンと呼ぶ声がするのである。降りたのは私共五人と外に英人米人等合せて二十人余りであるが、自動車屋達は先ず日本人を我が客にせんとするし、其処にいる荷物持ちの連中はお世辞にもポーターとは言えない人達であるが、日本人の荷物を持たんとしてさわぐのである。荷物を持つといっても、バスから降されたのをそこで宿へ行く自動車に乗せるだけのことで、私共はそれ位のことは自分でしようとするのであるが、バスのトランクから荷物が出ると共に彼等は荷物に手をかけて離れないのである。盗られては困るのでこちらは荷物を持って離さぬ回教徒を見失わぬようにするので精一杯である。

(四)

回教徒の生活は極めて低いようで、町の自

動車のとまる所やホテルの前に、ひるもよるも、何人かの回教徒が長い白服を引づって、私設ポーターの役目をねらって床机に腰かけている。彼等はそこで自動車を降りる人の荷物をホテルの玄関迄か或いは乗つぎの自動車迄持ち運びを手伝って、いくばくかのチップに有りつかんとしているのである。それで結構生きて行けるらしい。往来を横切る時に、手を拡げて安全に横切らして呉れる親切な素足の少年がいると思うと、これもチップをやらぬといつまでもついて来る。但し、ついて歩く間は全く親切な秘書役をつとめて呉れる。然し旅人にとっては全く一人でのんびり行動の出来ないうるさい国である。

さて空港駅から宿迄、大男のボスめいた運転手が自分のと仲間の二台の自動車を用意して、乗れと強く言うので、そのけんまくに恐れてそれに乗った。私共の宿はカイロ第一のホテルの隣の第二の（？）モーランドハウスである。あとから判ったが近い距離の所であったのに、相当に長い廻り道をしたらしく三十分程でホテルについた。我等の渉外課長の仁戸田博士は大男に二台の車代として三ポンド払った。あとで法外な値段と解ったが、

その時、既に空港以来小銭を出し払った関係もあり、深夜を三十分も走らせたことでもあるから大奮発して高額を払ったのである。ところが、それが仇となって、大男が仲間に半ポンド程しか分けてやらず、仲間の方が私共に少ないと言うので、私共はお前達に三ポンドも払ったと言ったことから、深夜の路上で運転手同志が取組み合いのけんかを始めたのである。異国の月の光さすビルの谷間のことで、何かしら一種せい惨な感じである。自動車の上にある荷物を未だ降さないのに、始めての土地のことであることかと、心細くなっている。幸い巡査がかけつけてくれた。然しこの巡査も仲々ちががあかないのである。仁戸田博士が手持ちポンドを巡査にやると始めて私共の為に、二人を取り静め荷物を自動車から降ろさせてくれた。巡査も仕事を始める前にチップを待っていたのである。しかし、その荷物は忽ちにしてホテル前にいた例の長白服姿の三人の回教人ポーターに握られてしまった。この二人がホテルに案内してくれるのかと思うと、そうではない。結局私共がホテルの受付に行き自分の室を取る手続をするのに、その跡を荷物をもってぞろぞろ

ついて来るだけである。私達にすれば何の役にも立たない者共と思われるのであるが、然し、ホテルの受付係は室に案内する前に、荷物を持って来た三人のポーターにチップをやれと言ひ、それをしないと室へ案内してくれないのである。それはポーター達がチップを受取る迄は立去らないのでホテルでも困るからであつた。結局五人の財布を探してエジプト銭少しにアメリカの銀貨を添えて三人に渡して帰らした。私共がこのようにして自分の室に自分の荷物とともに落つくことの出来たのは午前三時半であつた。

翌朝九時、ハウス四階のバルコニーから町を見渡すと、流石に太陽の町と言われるだけあつて、昨夜の暗雲はからりと晴れて、まぶしいばかりの日光が照りかがやいている。町の中央を満水のナイル河がゆるやかに流れていて、兩岸には見わたす限り高層ビルディングが立ちならんでいる。河幅はドイツのライン河よりも広いが汽船はライン河のような大きなものはない。水は雨上りの日本の河のようにかっ色ににこっている。これがカイロである。

目の下の町の交叉点を、これはヨーロッパ

のどの町でも見なかったような大型の流行車が行き交っている。その自動車の流れの中を、例の白長服の回教人が、巧みに衣をひるがえして飛び交って、大声で、乗用車の中の人に新聞を売りつけているのである。そのような混雑する中で、客を取り合つて大声で言い合っている回教人もいる。さて、このおびただしい高級乗用車を走らせ、車の中から新聞を買って行く人達は、エジプト人ではないようである。あの高層ビルで誰が何をしているか、スフィックスともになぞの国である。

(文学博士・大正大学教授)

在家の方々の為の

村瀬 秀雄 著

日常勤行式の解説

新書版九〇頁
定価七〇円
送料 八円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を
全面的に改訂、版も持ち易い新
書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

申込先 法無上人鑽仰会

迷執

牧尾良海



楊舜俞という人があつた。若い時から苦学をしたので頗る才智に長けていたが、家が貧しい為に都へ出て下宿住いをしながら、時の顯官たちから何彼と支護を受けて生活を立てていた。

或る時のことである。同郷の某^{なにがし}という者が葵という土地へ来ているのを思い出したので、久しぶりに訪ねてみようとして出向いて行つた。彼は生れつき酒が好きだったので、途中のとある居酒屋で二三合ひつかけ、その勢いで又出発しようとした。

店の亭主は、

「この道をずうーつと行けば鳳樓の土手へ出られますが、道のりはまだ八里余りも

ありますし、じきに日も暮れてしましますよ。これから先の所には怪しいものも出るということですから、いつそ今日はここへお泊りになった方がいいですよ。」と注意してくれたが、彼の方は酔いも手伝つて、

「なあに、怪しいものなんてあるものですか。それにまだまだ日が高いですよ。」とて聞き流し、平気で馬と下僕を急がせて進んで行つた。果せるかな、ものの三里と行かないうちに日はすっかり西山に沈んで、四辺が暗くなつて来た。おまけに湿っぽい陰惨な風まで出て、行けば行くほど真つ暗になつて来、もののあや目も判らなく

なつてしまった。今はもう酒もすっかり醒めてしまい、あそこで泊ればよかつたものをと後悔し始めたが、あとの祭りで、唯もう馬の進むに委せて漆暗の中を探る様にして進んだ。

突然、遙か彼方に灯の光らしきものがちらつと見えたので、勢い付いた舜俞は下僕を励ましながらかの灯の光の方へ馬を急がせた。一里余りも来たのであ

ろうか、荆棘ばかりの野つ原で、狐や兎の啼き声が無気味に聞えて、陰風は吹きつるばかりであつた。漸く灯の洩れている一軒の家へ辿りついたが、茅葺きのみすばらしい造りで、全くの一軒屋であつた。懸命に戸を叩いていると、やがて一人の女が出て来て、恐縮げに言った。

「妾独りでここに住んでおりますが、部屋も手狭ですから、お客様をお泊めすることなどは到底叶いませぬ。」

「夜道に迷つてしまいましたもので、別にお手数をかけようとは思いません。ただ下僕と馬を休ませてやりたいのです。夜があけるまで、このままで結構ですからおい

て下さると有難いのですが——」

舜俞が懇願これつとめると、女は

「貧しい暮しですから、貴方の様な御身分の方が御覧になれば、いぶせて御辛抱がならないと思いますけれど——」

と言いつつも、中へ招じ入れてくれた。室内は本当にがらんと置いて、調度らしい物は何一つなく、ただ粗末な土の台があるだけで炊事の火の気もない様である。女はと見ると、ひどいほろを着ており、燈火は青く仄かで光なく、冷灰の様である。女は壁の方を向いて坐ったまま言葉も出さない。舜俞は気づまりで張り合いもないので、下僕に命じて外から枯枝を持って来させると、火をつけてそれを囲んで下僕と坐った。女にもそばへ来てあたたまる様に言ったが、何彼とかこつけて来ようとしなかった。何度も誘うと、そのうちに漸く火の傍へやって来た。さりげなく見やると、頗るの美人である。白粉おしろい気ひとつなく、首にも何の飾りもつけていないが、天与の美質というか、仄白く匂い立つ様な肌色をしており、鄙には稀な女性であった。舜俞は、

意外な美人にめぐり会った悦びで胸を弾ませながら、

「貴女は、どうした訳でこんな寂しい所に独りで暮らしているのですか。」と訊ねてみた。

「妾のこれまでのことを、皆申し上げてしましましょう。折角、御立派なお方にお訊ねいただいたのですもの、包まずに申し上げますわ。妾は生国は越州で、姓を于かんと申します。妾の実家は当時何不自由なく過しておりました。良人になった人が、そもそも越の地へ派遣されて参りました時に、一眼で好きになってしまって、ひそかにこの人を慕う様になった訳でございます。やがてその人と結婚してから、良人に随したがって中原へ帰る途中で、流浪してここへ渡りついたのでです。」

「貴女の良人となった方は、一体どういう人なのです？ どうして貴女をこんな風におちぶれさせておくのです？」

舜俞の言葉に、女はみるみるうちに世にも痛ましい表情に変わって、苦しさを押えきれぬものの様であった。

「実を申しますと、妾は此の世の者ではございません。本当は、五代後唐の少主の御代の人間なのでございます。妾の良人は、主命を奉じて越の国へ来、戦争に従事していたのですが、お役がすめば妾を連れて中原へ帰るつもりでいたのです。ところが、良人は副将となっていたので、幾度も戦っているうちに到々戦死してしまいました。その当時は天下が乱れに乱れていたこととて、妾はある武士の為に掠奪されたので、一命だけは取りとめたのですが、この人も間もなく戦死しました。妾はそれで髪を落して丸坊主になり、顔には泥をなすりつけて、変装して郷里へ逃げ帰ろうと思いい、日中は身をひそめ、夜の間だけ歩いて漸く此処まで来たのですが、運拙なく又此処で群盗に捕えられて、密林の中へ連れ込まれました。盗賊達の為に飯炊きをしたり、着る物を縫ってやったりしてました。四五日はそうしてごまかしていましたが、幸うすいこの身、何時かは盗賊達に女であることを見破られる日が来るに違いないと思って、遂に古木に首を吊して自らの

命を絶ちました。流石に盜賊達も憐れんだものか、妾の亡骸を此処へ埋めて呉れたのです。

今は何という時代なのやら、見当もつきません。どちらを向いても茫々と遠いばかりで、消息を交すことも叶いませず、唯、郷里の空の方を仰ぎ見ているだけでございます。」

女はこう言って、さめざめと忍び泣くのであった。

「その当時は、一体何んな風だったのか、話してみてくれませぬか。」

薪をくすべながら舜俞がなお色々と問い尋ねると、女は、当時のひどかった天下の様子を事細かにもの語るのであった。戦争や飢饉のこと、肉親の乱離のこと、朝を迎えても夕べにはどうなるやら身も保ちかねていた当時の惨ましい状況は、想像を絶する哀れなものであった。舜俞は身につまされて聞き入っていると、女はやがて

「寧ろ治世の犬となるとも、乱離のときの人となるなかれという諺がありますが、本当にその通りでございます。今は一体ど

ういう御代でございますか？」と聞いた。

「今は大宋の御代ですよ。代々御立派な帝王が即位せられて、泰平が続いており、みはるかす限りこの国の版図です。人民は皆それぞれに生業に励んでおり、役人は役人で御役目大切に職務についております。言語や風習はどこまで行っても同じ様です。南は交趾の先まで、北は黒竜江の向岸まで、西は洮川、東は海岸線のところまでがこの国の範囲です。見わたす限り遠くのはてまで炊煙が立ち昇っており、もう、かれこれ百年余りも泰平が続いておりましよう。戸口には鍵は要らぬし、落し物は必ず出るし、商売も旅行も自由にできて、何の心配もいりません。天下万民は、それこそお腹が空けば食べ、渴けば飯むという風で、酒を飯み肉を食い、泰平を謳歌していますよ。」

「それでは、当節の困窮者でもあの昔の大臣宰相よりましな暮しができる訳ですは。貴方は、御自分がどんなにお幸せか、お気がつかぬほどでしょう？」

舜俞はこの女の慧敏なのが気に入って、何とかしたいものだと考えた。そこで下僕に命じて旅囊の中から紙や筆を出させ、詩一首を贈って女の氣持を動かそうと試みた。さらさらとしたためて出した詩はこうである。

「おん身、西施の国の人なるや、姿も心もたおやかなり。

やわ土に牡丹の花を開かせて、共に眺めん、陽和一点の春を。」

——つづく——

中村元・増谷文雄 編集
ジョセフ・M北川

現代 仏教名著全集 (全十巻)

- 第1回 日本の仏教 (発売中)
- 第2回 印度の仏教 (一月下旬刊行)
- 第3回 仏教一般 (三月下旬刊行)

隆 文 館

東京都千代田区神田佐久間町二の一
振替 東京 一五三一〇二番

熊谷直実の浄土信仰



阿川文正

武蔵の国の住人熊谷次郎直実は、源平争乱の世に於て數多の合戦に武功をたて、坂東武者の勇名を天下に轟かせた豪の者である。中でも一の谷の合戦に於ける平敦盛との組討は余りにも有名で、青海波と白砂を背景にした勇者と美しい公達——剛と柔とのこの取合わせは好個の文学的題材として、今日迄、多くの戯曲や物語にあわれに美しく伝えられている。その物語は如何までが事実であり、熊谷の真の心情が如何なるものであったかは、もとより判然と知る由もないが、弱い乍らも聊かも臆せぬ氣品を持った美しい若武者を手につけ、しかもそれが自分の一子小次郎と同年の公達と知

つては、輕傷を負うた小次郎に対する己が心痛に引き比べ、敦盛の父母なる人の心情を推して、豪胆武骨な心にも深い哀愁が宿った事であつたろう。

この熊谷次郎直実が源平の争乱が終つた後この世の無常を痛感したのは云う迄もない事であろう。そしてまた、鎌倉幕府の行政に不満を感じる事も相俟つて、名を「蓮生」と改めて発心出家したのである。蓮生は始めは伊豆国走湯山に参籠していたが、京都から来た尼公から法然上人の念仏の教えの事を聞き、上洛の意を決したのである。入洛した蓮生はまづ聖覚法印の房を訪ね、後生菩提の事に就いて窺いをたてた。

その対面を待つ間、蓮生は一心に刀を研いでいた。傍らの人が驚いて理由を聞くと、後生の為に命を捨てよと云われたならば即刻腹を切る為と答えたという。法印もこの志に感じて、「武人の後生助かる道をお教え下さる方は、吉水の法然上人しかなかるう。早速上人をお尋ねするがよい」と、使を添えて上人に紹介されたのである。

上人に面謁した蓮生房は、「私は今日迄、度々の合戦に出陣して數多くの人を殺しました。この様な私でも後世往生が出来るものでしょうか」と尋ねた。これに答えて上人は、阿弥陀仏の本願力により、たとえ極重罪人といえどもただ念仏を申せば、阿弥陀仏その声に応じて即ち現われ給ひ、極楽浄土に必ず往生させて戴く事が出来る旨を細かに説明されたのである。それを聞いた蓮生は、「命をも捨て手足をも切り捨てても、なお後生は助かるまいと思つて居りましたのに、ただ念仏をのみ称えれば往生が出来るという御言葉、何とまあ有難いことだ」と暫し感泣し、以後上人の弟子として熱心な念仏行者になったのである。

この蓮生房について誠に彼らしい痛快な搜話が伝えられている。或時、上人に侍し

て月輪関白の邸に参られた蓮生房は、縁のくつぬぎの所に伺候していたが、奥の間の御談議か幽にもれてくるのを聞いて、「あはれ穢土ほどの口惜しき所はあらじ、極楽にはかかる差別あるまじき物を」と大声で独語した。月の輪殿はこの声をきかれて、同席に蓮生房を召して共に談話をきかれた

との事である。誠にひたむきな求道心とともにその昔の坂東一の豪の者の面目躍如たるを偲ばせるものがある。又、「行住坐臥背不西方」の教えを文字通りに深く信じた蓮生房は、いかなる時にも決して西方に背を向ける事をしなかったという。京都から関東へ下向する時にも、蓮生は東方へ向けて歩む駒の背にあって、鞍をさかさまに置かせ、自らも後向きに西の方に面をむけて旅を続けたと伝えられている。

浄土にも豪の者とや沙汰すらん
西に向かい後みせねば

の一首とともに、これは「熊谷の逆さ馬」



として世に名高くしられた逸話である。左に掲げた写真は、蓮生房の後裔たる横浜市保土谷の熊谷家に蔵せられている「逆さ馬」の軸である。真に熊谷の信仰の素朴豪放な武士らしさを物語るものといえよう。

建永元年（一二〇六）八月、蓮生房は、「明年二月八日往生すべし、申すところも

し不審あらん人は、きたりて見るべし」という立札を武蔵国村岡に立てた。この事を伝え聞いた人々は多勢熊谷の宿所に集って、この類い稀なる行者の往生を拝せんと待ちわびていた。二月八日、蓮生は齋戒沐浴して高声念仏をつづけていたが、やおら目を開いて、「今日の往生を延引せり。来

る九月四日かならず本意をとぐべし」と言った。群集した人々が之を嘲けると、「またまた私の計らいにあらず、弥陀如来の御告げによりて来る九月を契るなり」と約して少しも動じなかったという。そして九月四日の後夜に沐浴し、弥陀三尊の来迎図を掲げて端坐合掌し、高声に念仏を唱えた。念仏の声がとどまった時、かつての坂東の強者深信の念仏行者蓮生房は、安らかに穢土の生を捨てて阿弥陀仏の浄土に往生を遂げたのである。「念仏とともに息とどまるとき口より光を放つ、長さ五六寸ばかりなり」と『四十八巻伝』には記されている。そして翌日の卯時まで紫雲棚引き、天上より音楽が流れ、妙なる香りがあたり一面にただよっていたといわれる。遺体を棺に納める時も又同じ様な奇瑞が現われ、西方からただよい来た紫雲が、一時ほど家の上にとどまって又西方指して去って行ったという。人々はこれらの瑞相を目のあたりにみて、上品上生の往生疑いなしと、蓮生房の徳をたたえ、その奇しくも尊い生涯を偲んで、今更の如く念仏の教えの偉大さに感じ入るのであった。（大正大学浄土学研究室）

大師御生活の管見

京都の檀那

村上博了

一

関白藤原兼実公は、王朝時代の末期院政時代の方ではあったが尚強大なる権力と富有であり、上人の最も有力なパトロンでもあった。その関係は「先生にも因縁あり」と伝えられる程密接なものである。建久九年正月は上人六十六才であった。正月一日から上人は草庵に閉じこもって「房こもり」といい、兼実公の請待にも行かないことがあった。有力なパトロンの特請にも応じないのである。

何故に行かなかったのでしょうか、そこに上人らしい点がある。たとえ先生に因縁ありとする親密さであるとしても、一日以来「別時念仏」修行、自策自勵してられ

た時として、修行のためには、特請としても問題ではない。

仏教信仰はあくまでも理論ではない実行である。信仰は、

なによりも、先づ実行を第一とする。た

とえ念仏の理事相は判っていても、念仏を口に申さなければ、如来はその声を尋ねて、おいでにはならない。

上人が別時會を修行され、ますますお念仏の数を増し、ますます来迎をうけることとなる。その時のことについて

御伝には

はじめには、まづ明相あらはれ 次に水想影現し のちに瑠璃の地すこしき現前す云云

と伝えている。

さて公の御心では、請待に應ぜられないということとは、去年のように「上人が御病氣」ではないかと、心配された結果である。公側近の藤右衛門尉重俊を使として伝

えられることは、

「浄土の法文、年来教誡をうけたまわりまして、心腑におさめがたいものがございます。何卒その要文をしるし下さって、且は面談になずらい、且は後々の御かた見ともいたしたい」というにあった。

人生は老少不定、今日あって明日をも知れない、全く浮世である。いつ何時に「おむかえ」があるやも判らない。万一の時のことを思うと、浄土宗の骨目を記したまわって、後々の片見ともいたしたいとする、公のいつわらない心況であった。

これが答は、選択本願念仏集となつて、浄土宗の宝典となる。本文では、上人の有力なパトロンでもある公の請待とあつても、上人が明瞭に「ことわっている」ところに、上人の「おべっか」「へつらい」ということなく、あくまでも毅然としたありかたを見る。信仰の友であつて、生活の手段でないことが明示されている。一言にしていえば、信仰に生きていられたのである。道心の中に衣食を見る訳である。一世の指導者である所以である。元禄十年正月

十八日、東山天皇が上人の教化に對して、
円光大師号を下賜せられた勅書の中に、

四海良導 行応三千末代

とある、上人の始終、仏法のための生活であつて、如来の本旨本願力念仏の行法の開示者であり、その伝道を生命とせられた。誰人でも貴賤や、ところをえらばずに「申されれば」よい、只申せ、申すばかりがつとめて、往生が出来、その功力は、やがて一族の往生の勝因となる、とするところに、仏教の精華を見る。如来の本願力をみる。

二

それは建暦二年正月三日のことである。上人八十才、釈迦如来の「ねはん」と同年であつた。

信空は、上人の傍にあつて看病していたが、いよいよその入寂は近いとさつたのである。上人に對し、

もし御師匠さま、古来の先徳方は、どんなもその遺跡寺院がございます。しかるにお師匠には、いま遺跡とするような精舎一字の建立もありません。

もしも万一に、おなくなりになりました

ならば、いづくを以てか、御遺跡地といたしましょうか。

と、申し上げたのであるある、上人は、

亡きあとを 一廟にとどめては、わたしのすすめる浄土宗は、社会に弘通しないであろう。予が遺跡は全国各地に遍満する。その故は、念仏の興行は、私の一期の勸化です。されば念仏の申されるところは、貴賤を論ぜず、海人漁夫がとまやまでも、みなこれ、わたしが遺跡であると仰せられた。

上人の御心は、天地間を家としていられる、人間の住むところ、口称念仏の声するところは、いかなる山里であつても、船中であつても、法然の遺跡であるとしていられる。

この大らかな心持こそ、いかなる祖師の人々にも「まさる」ところである。私の説、私の行法は天下の一大秘事である、免許なしには修行は許さぬというようなものではない。したがつて、あとを一寺にとどめるほどの狭量ではない。如来と同一宏大な心況である。私共が晴天を仰ぐあの愉快さ、ひろびろとしたかげのない気持と一体

である。天地の生命と同ようである。念仏こそ永遠の灯である

三

かような上人の心況は、教団の有力者に通ぜぬことはない。私心なく私欲のないことは、人生無上の宝である。帰依者は、ふえても減る筈がない。したがつて、上人の生活はゆう福ではなくとも困るようなことはなかった。上人からすれば「物」は預けておくようなものである、必需品とすれば誰れかが揃えてくれる。誰人と特定ではなくてよい訳である丁度極楽世界にあるように、自然に現われるようなものであつたらしい。人格の反応であらう。

上人四国讃岐小松庄生礼寺から摂津勝尾寺にうつられ西の谷（勝如上人故地）に草庵を結んで住居せられた、御法には、おりふし恒例の引声の念仏ありけるに、僧衆の法服研壞してみぐるしかりければ弟子法蓮房をもて、京都の檀那におほせられて装束十五具調して施入せらる。寺僧よろこびて臨時に七日の念仏を勤行しけり。

とと伝えている。



近代高僧伝

獅子谷 仏定

大橋 俊雄

瀬戸内のわずかな平野が山間にかかるころ、安芸国賀茂郡野路村内平に、吉岡和作の次男として生れた仏定が、三津口瑞雲寺の善譽円麟について得度したのは、弘化三年九月、年齢九歳という幼い頃であった。安芸は真宗門の盛んな土地であり、従って、ここに育った彼の両親も、日夜仏前に合掌し、お文さまを手にして、弥陀の慈光に感謝していた。彼の出家の動機となったのも、父母のもつ深い信仰からであったという。長じて江戸におもむき、増上寺の学寮に入って、大雲や義嶺に宗乗を、楠玉諦や和田智満には律部を

学び、又福田行誠にも師事して薰陶をうけるなど、熱心に学問を究めたかたわら、萎微した宗風をもりたてるには、戒律によらなければならぬと心に誓い、その学修にも余念がなく、誰いうことなく、彼の大器たることが是認されていた。その頃京都新京極の光徳寺では後住を欠いていたので、誰彼となく物色中であつたが、時に白羽の矢は仏定にめぐつて来た。時に慶応三年三十歳の時のことである。

光徳寺に住した彼は閑暇さえあれば熱心に念仏をとえ、朝は未明に起きて勤行し、寺

門は内外とわず、いつも清浄そのものであつた。「一掃除、二勤行」が彼の日課であり、彼の日常を目にし耳にした人たちは、此世に稀れな殊勝な僧とし、その心がけに目を見はつていたが、その中でも何かと注意していたのは、毎朝清水観音に参詣していた吉田氏であつた。彼は長らく鹿ヶ谷法然院の総代をつとめていた。それが一日ではなく、何年となくつづけられる仏定の姿であつて見れば、自からの僅かな行動を反省しても容易なことではない。時あたかも法然院では勲譽大定のあと靈跡法然院をつがせるに適當な弟子がなかつた。この上は他に求めるに外なしということとで、陰に陽に後住をさがしていた時、吉田氏の頭にひらめいたのは光徳寺の仏定のことであつた。早速に彼僧を訪ね「ただ今法然院では後住を求めておりますが、いざという時になると人がおりますん。貴僧こそ忍濃上人の法燈をつぎ、常行念仏を再興して下さるに誠にふさわしいお方と常々考えておりました。この上はどうぞ、まげて法然院に来ていただきたい」と辞を低くし、無理にお願いして承諾を得、廿四世大定の付弟となり、名を仏定と改め、廿五世の法燈をついだのは明治四年十月のことであつた。

法然院は昔宗祖法然上人が別時念仏を修し、その門弟安樂・住蓮が六時礼讃を行じた旧跡と伝えられ、延宝八年知恩院三十八世玄譽万無が高足白蓮社忍濃をして此地に寺基を求めて建立された寺院であり、翌九年六月万無の示寂近きにあるを知った忍濃は、十有余人の同行を結衆して七日七夜の別時念仏を修し、その後もたゆることなくつづけられた。

これは翌七月鹿ヶ谷に移されたけれども、一日として欠かすことなく、今に至るまでつづけられている。このような誠に静寂にして清浄、おちついた雰囲気の中に彼が止住したのは十五年まで凡そ十一年間の長きに及び、白蓮社戒宏に後をゆだねて清水西光寺に入った。二十五年六月には招かれて筑後善導寺にすすみ、二十八年十月には小松谷御房正林寺に転じたが、彼はどこに住しても日課三万遍の念仏はおこたることなく、又何れの寺にも念仏講をつくって念仏の相続ができるようにといって、常にその雰囲気と環境の設定に心を用いていた。大正三年十月大本山清浄華院に進董し七十世の法燈をうけた頃、曾って修せられていた常行念仏は断絶していた。「何とかもとのように再興したいものだ、廃絶しているとは何ともったいないことだろう」

と、この旨を大阪の信者にお話しなされた所、誠に結構なことですと、当時の金で一万円の寄付があった。これを基金とし、更に東奔西走して浄財を集め常行念仏を再興し、自からも昼夜に策励したが、常行念仏を各地に行うことができるようにしたということは、一に彼の徳行が光輝にみちていたからであった。そして性格はどちらかといえば性急な方で、各地に巡錫しても随行の方は大変で、念仏申すにしてもそのような性格はいつとはなしにあらわれ、何時しか「名阿上人の念仏」と言われるようになった。念仏ははっきりと申されたが、いささか早目であつたらしい。

説教をなされるにしても、話題は常人と大差ないのに、聞き手の人は随喜の涙を流していた、堂々たる説教は何か真にせまるものがあった。これも一に徳のしからしめるところであつたろう。

これより先き、彼は一時渡鮮し仁川寺を建立したが、在鮮僅か二年にして帰朝西光寺に隠棲していた頃、信者達の協力によって家政女学校の創立を計画された。九州巡錫の折「今日の女学生の教育をこのままに放ってお

いてよいものだろうか。個人主義や唯物思想、無神論というような思想が一般社会を風靡し、その結果若い女性達の献身・信仰・柔和という美德がややもすれば古い道徳として冷笑されようとしている。このままにしておいたならば明日の日本はどうなるでしようか。恐らく心ある父兄たちはこのことについて苦悩されていると思いますが」と話をもちかけられたことがあった。これが起縁となつて女学校創立を思いたたれ、鳥丸五条因幡薬師で開校されたが、仏教主義に則つてできたミツシヨンスクールとして、当時としては珍しい存在であつた。

浄華院に董じてからも老の身をいとわず、毎月十日の法然院別時には欠かさず、念仏申しつつ歩いて荒神橋を渡り、吉田山を越えて随喜されたという。彼にとって念仏は心の糧であり、唱えなければいらぬという熱烈な念仏行者であつた。明治四十二年司教、大正十三年春大僧正に叙せられた彼は、間もなく病床に臥し五月二十二日八十七歳を以て安養の浄土に旅立たれた。法名を心蓮社念譽名阿一専仏定大和尚という。

初午の頃



黒川 弘賢

正一位稲荷大明神と書かれた五色の旗が風にはためき、遠近の稲荷から太鼓の音が流れて来る。旧二月の初午の太鼓ほど心をはづませるものはない。近隣の子供達とカラッ風の吹く櫓の上でひびだらけの手でばかりをにぎり『ハゲランチャン、ハゲランチャン、ハゲハゲランチャン』とおどけた囃子文句に合せて囃子を競った幼い頃、炬燵で『しもづかり』を食べながら祖母よりきいたお玉稲荷にまつわる伝説などを出す。

○

お玉稲荷は私の住む町から三里程離れた栃木県下都賀郡水代村新井にあり、今なお村人の参詣の多い社である。

元禄の昔、この村に庄太夫という紺屋を営む男がいた。彼は三十代の働き盛りで、お玉という妻との間には庄太郎という子供もあった。夫婦は真面目で、近隣の評判もよく、数人の若者を使用する程繁昌していた。

庄太夫は商売上留守がちで、その間は夫婦に信頼の厚い若者頭の与四郎がお玉を助けて働いていた。庄太夫は、隣村の俳号を

朗閑という隠居者に、幼少の頃から大変可愛がられていた。朗閑はかねて娘の菊江を庄太夫に娶せようと思っていたが、彼がお玉と夫婦となつたのでその夢も破れた。菊江を他家に嫁せたが、折合悪く家に戻って来てしまった。朗閑はこの不幸な娘をふびんに思い、我子可愛さ故に悪計をめぐらした。朗閑は村人に紺屋のお玉と与四郎が密通していると吹聴し、更に庄太夫を我家に呼寄せ、お

玉の不義をなびつた。そして、刀を玄閑の胡麻殻の束の中に入れておくから、調べ、合点がいったら取りに來いと入智慧をした。数日後、庄太夫は髪を結っている妻の背後から突然切りつけた。彼は無実を訴える妻の乱髪を、側にあった砧石に巻きつけとどめを刺してしまった。更に外出の与四郎を、村はづれに待ちうけて斬り殺した。その翌日から、庄太夫は砧石の上にお玉の姿を見た。一方、朗閑も夜な夜な二人の亡霊に悩まされ、或夜、菊江をお玉の姿とみて、槍で殺してしまった。半年後に彼も庄

太夫に誤殺されるというありさま。

数々の殺人を犯した庄太夫は身心ともに衰弱してしまった。或夜、お玉の亡霊が現われ、「庄太夫殿私の潔白がわかったか、無実の罪で殺された二人の無念がさとれたか」とよばわったので、長い悪夢から覚めた彼は、前非を悔い出家の身となって、この辺に草庵を結び、二人の霊を弔った。そして六十四才で辞世した。

○

お玉稲荷は、お玉の家に残った血染の砧石を祠に入れて、建立されたものである。

そして三人を殺した刀は、その後やたらに人を斬りたがるので、村人相談の上、岩舟山高勝寺（岩舟地藏で有名な寺）に奉納した。村人はかような事件をひきおこした刀が、胡麻殻の中に忍ばされておったので、以来胡麻を作ると祟りがあると作らなくなったのだと語り伝えられている。

○

初午は火早い日といわれている。「今日は初午だから火のもとには気をつけるのだ

よ」といわれた祖母の言葉は、今も脳裏から離れない。又よくこの日は半鐘の鳴ったことも覚えていいる。それ故に、火に関する禁忌も多く、各家庭ではなるべく火を焚かぬようにしている。風呂をわかすこともタブー、一般家庭は勿論町の銭湯も休みとなってしまう。

火防の料理として、初午に必ず上げられるものに「しもづかり」がある。しもづかりは、下野の人であれば誰れもが知っている栄養万点の料理で、これを作るのは、初午の稲荷に上げるのに限られている。人によって、二の午にも作るが、この時は前の残りを取っておいて、これを種として入れぬと火事になると畏れられている。初午の頃はカラッ風が多く、空気も乾燥しており、しもづかりの材料の塩鮭の頭を、丸一日も火にかけて煮なければならぬので、つい失火率も多くなるので、長時間火を使用する時の、古人のいましめが含まれているのである。

しもづかりは経済的な料理で、材料は塩鮭頭、大豆（年越に撒いた残り）酒粕、大

根、人参等の残品をかきあつめたもので、製法は、塩鮭の頭をこまかに刻んで、長時間煮て柔かにし、その中に大豆、酒粕と大根、人参をオニオロシと称するもので、こまかについて醤油、砂糖の調味料で煮こんだ下野特有の野趣にあふれた料理である。

○

私の家では、初午の日はお茶を飯まぬ慣習があり、かわりに桜湯を使用する。桜湯の香に接すると、春近しの感が深まる。名物のカラッ風、梅の香、麦の緑などの自然の姿態にも、冬の空寂からぬけ出して、新しい運動を展開する息吹を感じるのである。

（大正大学宗教学研究室）



龍安寺方丈庭の卑見



藤 木 随 教

京都北郊衣笠の丘に続く龍安寺に相阿弥の作庭に隠された彼の芸術観を探るためこの寺を訪ねたが、道すがらもう草の草の葉末に紅葉しそめて京の近郊は秋が早いようだ。この寺は龍安寺泉石で著名のとおり、泉石布局の妙を以って京都観光の対象となっている。

この龍安寺の庭は、室町時代相阿弥初期の作庭に成るもので、始め徳大寺公有の所領を細川勝元が譲り受けて、長祿年間（一四五七—五九）宅を構え、後、大徳寺宗因の法嗣である宗舜、妙心寺中興の祖となった日峰和尚を請じて禪院とし、勝元の法名に因んで龍安寺と名付けられたのである。この庭は衣笠

山の南麓の小高い丘陵地を占め、この書院からの眺望の東山仏閣。八幡源廟。淀の長流。

伏見城趾。東寺宝塔。花園暮鐘。その他を合せ龍安寺八景として呼ばれている。実に好ましい心気静けさと呼ぶ土臭である。この背景を控えた方丈前庭は、南と東と西の三面は底い練壁で劃され、奥行五間、間口十一間余、全庭は白砂を敷き、周囲に浅い排水溝がめぐらされ、約五十余坪の小庭で、五ヶ所に二つ、三つ、五つの石組を配した総石十五個を使用した庭中一本の草木も見ない一覽実に奇というか、無言の平坦庭であるのだ。

この全庭の妙奇とすることは、十五石の

扉の御法語

阿弥陀さまの本願のお力によって、衆生が彼岸にゆき、往生できる場合と、いかに本願のお力が強くとも往生できない場合と何れにしても二つの場合があります。

そして本願に乗ずることのできない場合、すなわち仏さまの光明に浴することのできない場合とは、罪をつくったときと、道を修めんとする心のなかったときとの二つの場合があります。何故なら罪をつくったときには、誰も後悔するもので、ああ自分はまだ駄目だ、お念仏を申したとて助かるわけがないと自棄になるからであります。また道心つまり菩提心をおこした時には、このように道心があればこそ、お念仏の功德もあるのであって、他の人のように道心もないくせにお念仏申したとて、何んの功德があるものだろうと、まず以て自分の道心を高く評価する自力の己惚れがさきになります。したがって、この二つの場合はお念仏を申したとて、それはほんとの他力本願によるお念仏でなく、往生はむづかしいことになります。

このように上人がお説きになり、次にさ

内、必ずその一石が隠れて、如何なる位置から望んでも十四石しか見えないのである。

然し、作者の意が、後人の推意かは知らぬが、古くからこの石の布局に何らかの内容を醸そうとして、「虎の児渡し」の庭などといった意匠に奇抜な出世間的であつた故に、後世の人々の好奇の的となつて真の鑑賞を誤る者がすくなくない。数刻書院に止まるうちにも、現前の観光客の語らいはそれであつた。

ここに作者相阿弥の心境が那邊を狙つたか、この作庭の芸術境を窺つて見よう。古来作庭の焦点が、生活上の必需に生れた現実的庭。印象を追想する趣好の庭。主人の権勢を表現した豪宕型等、こうした物の取引された作庭を、表現上、平坦庭場的庭。又山上とした前庭から奥へ高く。あるいは、一組の庭を幾つか組合せての高底を敷き上げたといった作型の園庭又は廓庭の庭園観と違い。この庭の焦点は、自然そのものの素材の脱化した作者の個性のこなれた最も簡素な骨組みの自然の美的表現であつて、観念において端的で、表現上の力感に基いた芸術の美の絶対の表現と見るのが妥当と思う。この拠つて来つた

彼の時代的影響の消化のこの表現は、すなわち禪的自然観と南面的描出法の透徹したすこぶる円熟した自由表出といった境地であると思う。その見解に拠つて、この庭全局を総合的に、しかもこの題材から脱してすこぶる素純な官能的な態度で見るところに、この庭の奇矯好奇の種の理由を感得することが出来、始めてそこに大自然や作者の大風格に触れ得ると思う。この現実には、この寺を包む後世案出の八景が作庭以前からあることを忘れられない。

そこで、この南方練壁外の松樹の間に隠見する周囲の雙丘大観するところの一元化の力感に、作者の洗練の巧みさと意図の躍動焦点の寂然たるものを覚ると思うのである。

はからずも、この寺の大自然庭の一部、花園辺りの暮鐘は、かつてのこの丘陵に對座した人間の素志を折込んだ相阿弥の作庭構想の簡と復を縫つて滲み透つて来る八景の一つである人相感、他の七景を併せ溶かして、観る者に、語る者に、聴く者に、ここまで身を削つた作者の悲しみの宗教が今も生きていた。

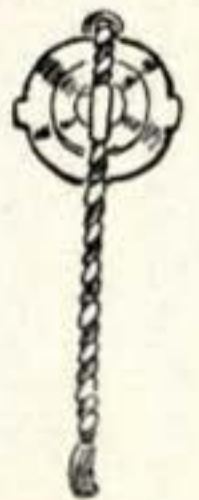
て、それなら、本願に乗ずる場合とはどんな場合かというお詞が続きますが、そのお詞が扉の御法語であります。

ところが、この御法語に示されているとおり本願に乗ずる二つの場合とは、罪をつくつたときと、道心がおこつたときとの二つの場合であります。つまり上人は「他力本願に乗ずるに二あり、乗ぜざるに二あり」といわれ、そのいづれの二つの場合とも、罪つくるときと道心おこるときであるとお説になつてゐるのです。

わたくしども個人にとつて罪つくるときと道心おこるときは、正反對のしかも特別な場合であります。しかしよく考えると、程度の差こそあれ、わたくしどももの日常は、この兩極端の間を往たり来たりしてゐるのが実態であります。すると上人が特別の場合のごとくいわれた二つの場合とは、決して稀なことではなくて、日常の刻々に移り変わる心の有様を申されたと由すべきでしょう。だからこそ上人は、本願に乗ずるも、乗ぜざるも二つの場合ありとし、しかも双方同じ場合をくり返して挙げられてゐるのです。尚、この御法語は勅修御伝第二十一巻に出てゐます。

仏祖のことば ②

自己にはきびしく



他には寛容をもつて

宮 林 昭 彦

他人の過失は見やすく、自己の過失は見がたし。他人の過失は初般のごとく撒布し、自己の過失は、これを隠匿するごと、狡猾なる賭博者のカリ（最悪のサイコロ）におけるがごとし。

仏陀の説法のかたちは、質問に対して答えられたものと、質問によらず、仏陀がすすんでおしえられたものである。

一には、聞き手の性質や能力に応じて説きあかされたものである。それは、ちょうど、医者が病人のやまいに応じて薬をあ

えるように、仏陀も、苦しみ悩みにあえぐ人びとの立場にたって、それに相応した救済の手をさしのべられたのである。

二には、仏陀が、このころの中に発露された、いわば、人生本態のあり方を、みずからの体験を通してさとされたものである。ウダーナといわれるもので、無問自説と訳される。

前掲のことばは、法句經の一節であるが、これは、二にあたる經典である。

素朴なことばづかいではあるが、短い詩的な偈文を通してうつたえてくる、このことばは、心の琴線になにかしらしみじみと

ふれる思いがする。

しずかに、わたくしたちの日常生活をふりかえってみるとき、他に対する批判、いな批難が多すぎはしないだろうか。

たしかに、現代のわたくしたちの生活のなかで、しあわせにおもうことの一つに、言論、思想の自由ということがある。かつての過去の時代のごとく、言論は弾圧され、思想は限られたワク内でしか考えられなかったことをおもうと、いまの時代に生きるありがたさを感じる。

しかし、自由ということは、いうまでもなく、なにを放言してもよい、ということではない。自由に考え、そして発言できるということとは、いいかえると、ささいな自己の一言のなかにも責任をもたなければならぬ、ということである。

されば、自由だからといって、勝手気ままな言論をもてあそび、もし、ひとが失敗するのを見て、ただちにののしり傷つけるとしたならば、ゆるさるべきことでないであらう。

ひるがえって、周囲をみまわしたとき、

傷つけあい、ののしりあって生きることが、あまりにも多いのではなからうか。家族生活のなかにおいても、近隣のつきあい間においても、ひいては社会生活全般にわたり、大きくは国家間においてさえ、言葉じりをとらえ、悪意のない失敗にまで、きびしすぎるほどの反省を要求する。

他人の過失を詮索し、つねに怒りやすき人の煩悩は増長す。かれは、煩悩の滅尽を去ること遠し。

生きるということは、現実であり、事実である。観念や、理くつでは生きられない。そのため、ことばの通りに、ところを調えることは、なかなか難しい。

他人に対する批判はいくらでもできるものであるが、自分自身に対する批判は容易ではない。顔のまん中についている塵さえることはできない自分であってみれば自分の行動や心のなかのみにくいごめきは、到底みきわめることができない。

しかし、よくよく考えてみると、わた

(童)(心)(仏)(心)

雨が降る降る

雪も降る

「ただいまっ。」健ちゃんの声と、玄関のドアがあくのが一緒。ランドセルをどかんと放り出す音と、ガタンと玄関をしめる音が一緒。

学校から帰って来ると、健ちゃんはすぐに遊びに出かけます。

ところが今日は違います。ランドセルを背負ったまま勉強部屋にはいると、算

数の勉強を始めました。

「あらら。どうしたの。健ちゃん。お天気が変わるわよ。雨が降るわよ。それとも雪になるのかしら。」

おかあさんは、茶化しました。

「それなら勉強しないよ。雨になったら困るものね。雪になったら尚嫌だ。」

健ちゃんは、いつものように遊びに行っていました。

せっかく自発的に勉強しようと思ってるやさきに、おかあさんの皮肉や、茶化しに、良い芽は枯れてしまいました。

おかあさんの負です。残念です。チャンスをのがしてしまいました。(桐)

くしたちの反省の仕方は間違っていたようにおもえる。

それは、他人に対しては、きびしい言葉もつかい、反省をうながすのであるが、おのれに対しては、たえず、あまやかして生きているのが人間の現実のすがたである。これではならない。

むしろ逆に、他人に対してはあくまでも

寛容であらねばならないし、自己に対しては、きびしすぎるほどのきびしさがなければならぬ。

社会生活をしていくうえに、とくに、現代のように、言葉づかいのはげしい世の中にあっては、余程つつしんだ態度が、自身自身につよく要求されるのである。

(大正大学講師)

で事の位これにーな



雪 徴 田 合

波静かなる 瀬戸の内海
今明け渡る 空の彼方に
希望の光 旭は昇りぬ
おお麗しき 「仙が島」

昭和廿六年七月十四日夜の出来事。

折からの台風、ここ山口県南陽町沖に浮ぶ一孤島も見舞われ、児童養護施設「希望の家」に於ける唯一の通学用の舟破損、山羊舎倒潰、三頭の山羊死、其他被害甚大。

婦人記者「この度の台風で、「希望の家」の皆様が、非常に貴重なご体験を得られましたとか。で、どうかそれを、お洩らし下さいませんか？」

松永主事「どうもそれは……。イエ申しました。では、まず吉村君から。」

吉村君（教護児14才）「せっかくの日曜も雨に暮れて、夕食後元気に皆と話合っていた僕も、海のシケがだんだん強くなってきたので、家を飛出して倉庫の前まで来ると、門衛のおじさんが水がえをしておられました。しばらく手伝いしていると誰かが大声

で、「庭の薪が流れる！」と叫んでいる。あの薪を流してはならない。おじさんと二人で、家におりたけれど、海の汐はだんだんふえて、高くてかく打ちよせてくる。自分の体を流さない様に、片手で岩の角をつかんで、片手で拾い上げるのですから、なかなか思う様にゆきません。でも、出来るかぎり拾って、家の中に駆け込んだ時には、もう時計は十一時を過ぎていました。見ると小さい連中は、こんな騒ぎなど全然知らないで、スヤスヤと夜中の夢でした。

大窪君（孤児12才）「そんな事ちっとも知らなかった僕は、オシッコがしたくなって目を覚まして見て、ビックリ！ 僕達が寝ている居室が、押流されそうなのです！ 皆と一しょに直ぐ飛び起きて、本館に駆け込みました。その時僕、足がブルブルふるえました。小母さんに……。皆と一しょに小母さんにかじりついたけど、まだ足がふるえました。その途端、大きな音と一しょに、天井がドサツと落ちました。でも平気、元気な小母さんの指図で、部屋のガラスがこわれない様に、僕達皆でうちがわら押え

て、一しうけんめい守りました。

石井さん（炊事係助手18才）「今日は施設長さんが留守ですし、小母さんに心配かけなくてはならないと、誰も彼も一しうけんめいです。見る見るうちに波はお花島を洗い。家の奥深くまで流れ込んできました。其時です！ 天地がひっくり返る様な響がして、雷が落ちました。直ぐうしろの山です。大きな岩や松の木が、ゴロゴロと転がり落ちてきて、家につっかりそうになりました。ところが、それよりもっともつと大変な事が起りました。

大窪君「舟が、舟が押流されそうなんです！ 松永主事「私共は島に住んでいますので、子供達が学校へ往復するにも、またどこかへ出かけますにも、舟を必要とします。いわば舟は、私共の足なのです。

吉村君「その舟を、押流されてはならない。四つばいになって、波止場のさきまで出て、舟を守る子供達の、必死の努力も空しく、三本あったロープの中、二本まで断たれてしまいました。

石丸久美子さん（施設長々女14才）「ただ一

その舟の為に？」とお思いになりました。うけれど、私達はツイせんだっても舟を失い、この程やとまた新しく、手に入れたばかりでございます。

吉村君「イカリ綱一本で保っている舟に、山本さん（指導係助手19才）が残っている。それを助け揚げる為に、岳兄ちゃんが……」

松永主事「岳兄ちゃんというのは、この「希望の家」施設長の次男で、目下苦学して、広島大学々生。ちょうどその日は日曜で、帰省しておられました。

吉村君「岳兄ちゃんが、自分の体に綱を巻きつけて、波の中に飛んでゆかれ、そのまま姿がわからなくなってしまうました。

石井さん「大切な人の命の二つまで、行方知れずになって小母さんが……」

松永主事「さき程から「小母さん」という言葉が何度も出てきましたが、「希望の家」では、献身的にみんなのお世話をしているこの施設長夫人のことを、親しく「小母さん」……こういう風に、呼び馴れています。

婦人記者「小母さん」……？ オオ何という自然な、あたたか味のある呼び名でしよう。愛情というものを、ちよとも押しつけない、慎しやかな……」

石井さん「小母さんが出て来られて、荒波の中に、行方知れずになった二人の中の一人が、岳兄ちゃんと聞いて、「ア、よかった……」とおっしゃいました。

松永主事「施設長夫人は、この行方知れずになった二人の中の一人が、自分の生んだ子であったという事を聞かされて、「ああよかった」という言葉が、きわめて自然に口から出てくる、そういうお方であまりす。

婦人記者「ほほう……」（感歎）そうでしょうとも。先刻ちょっとお顔を拝見しましただけで、私もその様なお方だと、明瞭に感じました。

石井さん「大きい者も小さい者も、「早く嵐がおさまります様、岳兄ちゃん達が生きて還られます様に」ってお祈りをしながら、電気の消えた室の中に、一かたまりになつて、ただ時間の経過を待つばかり……。その間、どの位の時間がたちましたか知ら……」

……？

吉村君「小母さん！ 小母さん！」「お母さん！」突然、さかまく波しぶきの中に、半死半生の体を、互いにもたせかけ合いながら、つつ立っておられる二人を発見した時、私達は、まばゆいばかりの後光というものを、たしかに——、ハッキリと見ました。

石井さん「そうです！ 私も見ました！

大窪君「そうして指さされた方を見ると、そこには僕達の、大切なたいせつなお舟が、無事な姿を横たえていました。

婦人記者「オオそうでしたか、そうでしたの！

石丸さん「安心して、ぐったりして、倒れてしまった山本さんと兄とを、皆して連れ帰りましたが、私こんな嬉しいことはございませんでした。

大窪君「岳兄ちゃん有難う！ 山本さん有難う！ 僕達、岳兄ちゃん達はもう、死んで還らないのかと思った」と、耳に口をつけていうと、岳兄ちゃんは……、岳兄ちゃん……。

吉村君「岳兄ちゃんはニッコリ笑って、低い

けれど男らしく、答て下さいました。「なに、これ位の事で死にはしないよ。また死んではならない。ここに居る、みんなの為に、世の中のためにも、またお母さんお父さんの為、そして、（ニッコリ）……僕自身のためにも。」

一同「（大笑）」

石丸さん「そのうちに風も静まり、間もなく夜も明けてゆきました。

大窪君「僕達、嬉しくて、うれしくてたまりませんでした。

石丸さん「青い空、ひろい海。昨日の嵐などどこへ行ったのでしょうか……？ 渚に打ちあげられた、かけたお椀、下駄のかたはし……。大切な人の生命も、方々できっとたくさん……、流れたことでしょう……。

吉村君「目の前に体験した、余りにも烈しい台風に、自然の威力の前には、人間の力なんて、全く無力みなものだ、……一時は感じました。然し、岳兄ちゃんの「これ位の事で死んではならない！」。その意気に僕達も、ふるいたつ様な空気が出ま

した。

松永主事「小さな島に起った、ほんのささいな出来事です。

婦人記者「いいえ如何してどうして。……

有難うございました。「希望の家」その名に恥ぢない皆様の、美しくもたくましい愛の力で、所謂新聞三面記事を賑わす様な事件など、起らずに済みました。ほんとうにおめでとうございました。

その後、この児童達のたゆまぬ努力と、各方面から寄せられた愛情との結晶は、間もなく見事なエンジン附通学用船となり、長い突堤「友情波止場」、また新しく大きな宿舎・食堂・講堂・更に晴れて果立った人々がはるばる訪れた時の為のホテル「洗心寮」等々。

施設慰問の人々の中には、時として多少好奇心も抱いてきたらしい人も見受けられるがその様な人も、帰る時にはすっかり心清められ教えられ、瞳うるませて惜別。「サヨナラサヨナラ」と岸から船から、互いに見えなくなるまで手を振り「また逢う日まで……」。

浄土の会員を一人でも多く

◆どなたでも会員になれます。

◆会費は年額六〇〇円です。

◆会員には毎月浄土を配布します。

◆この会は皆様の会ですからその発展の為に
お一人でも多くの会員をつくって、正しい
信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利
用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

今年も「浄土」で明るい生活を

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一カ年

金六〇〇円

（送料不要）

浄土 二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年一月廿五日 印刷

昭和三十六年二月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

～ 原色版'絵葉書の最高技術陣～

芳文堂の営業品目

全 国 観 光 絵 葉 書
日 本 趣 味 カ ー ド
各 種 観 光 印 刷 物 発 行
高 級 紙 文 具 類
輸 出 向 各 種 カ ー ド 類



株 式 福 田 芳 文 堂

財団法人 日本交通公社 提携
本 社 横 浜 市 中 区 長 者 町 5 の 5 6
直 売 店 東 京 タワー 二 階 出 口 (東 京 観 光 物 産)
代 表 電 話 (8) 7 8 5 1, (8) 1 9 6 5, 夜 間 (8) 5 3 1 8.